馬場毅著

日中戦争と中国の抗戦
――山東抗日根拠地を中心に

集広舎／2021年4月／456頁＋索引／6200円＋税

菊池一隆

まえがき

馬場毅氏（以下、敬称は省略）は日中戦争（盧溝橋事件から中国勝利まで）下の中国共産党（以下、中共と略称）、八路軍、新四軍など研究を推し進めてきたが、[1] 特に山東省の専門家であり、最初の著書『近代中国華北民衆と紅槍会』（汲古書院、二〇〇一年）は山東における紅槍会をとりあげている。したがって、本書は、馬場にとって第二弾目の山東に関する専門書であり、同省を一貫して追究してきた労作といえよう。本書のテーマの嚆矢は、「抗日根拠地と農民――山東区を中心に」（『講座中国近現代史』第六巻、東京大学出版会、一九七八年）であるから、実に本書の完成まで四〇年余かかったことになる。

ところで、山東省は、歴史的には北宋を舞台とした『水滸伝』の梁山泊のように英雄豪傑が多い地域とされる。近現代史においても興味深く、脚光を浴びてきた。例えば、義和団発祥の地、五・四運動の背景にあった第一次世界大戦後、ドイツの租借地青島の回収問題、田中義一による山東出兵、及び省南部には、国共合作の戦闘により日本軍が敗退したとされる台児荘も位置し、江蘇省の徐州も近い。烟台、威海衛、そのうえ、山東華僑出身地の日照がある。

馬場は、こうした山東省の中共抗日根拠地（辺区）に真っ向から切り込み、実態解明に取り組み、その成果を著書として纏め上げた。これには二つの意義がある。第一に、日本では、その重要性にもかかわらず、戦前の中共史研究への関心が薄れ、それをテーマにする中国近現代史研究者が減少した。反面、人民共和国成立後の中共、とりわけ政治学、国際関係論から現在の習近平体制に関する研究が増大している。そうした状況に一石を投じたといえそうだ。第二に、戦時期、中国には陝甘寧、晋察冀、晋冀魯豫など、多くの抗日根拠地が存在していた。各辺区の研究も十分とはいえないが、不明点の多かった山東省に焦点を絞り、多側面から実態、特徴を明らかにした。これにより中国辺区全体、各辺区の関係、

共通性と差異などを考察する貴重な一歩となった。

各編各章の構成と内容

本書の構成は以下の通り（各章の長すぎるタイトルは簡潔にした）。

はじめに――本書の内容と研究史

第一部　山東抗日根拠地と八路軍の発展

第一章　武装蜂起の展開と山東縦隊の成立、初期抗日根拠地の成立

第二章　抗日根拠地の形成と農民

第三章　対峙段階の開始と国共対立の激化、政権組織・各種組織の樹立、各地における抗日根拠地の発展

第四章　日本軍の治安強化運動と中共、八路軍の対策、中共、八路軍の反撃から日中戦争の勝利へ

第二部　山東抗日根拠地の抗戦力強化政策および日本軍の対策

第五章　山東抗日根拠地における財政問題

第六章　山東抗日根拠地における通貨政策

第七章　山東抗日根拠地における民兵

第八章　日本軍の山東抗日根拠地に対する治安強化運動について

第九章　山東省の傀儡軍について

結語

以上のように、第一部は根拠地全体と八路軍に主に焦点を当て、第二部は根拠地内部の各種政策などの各論で著書全体を充実させている。

第一部は、日中戦争開始（一九三七年七月）から終結（四五年）までの時期を対象とし、中共の山東抗日根拠地と八路軍をとりあげる。

第一章では、山東省における中共組織の再建過程、八路軍山東縦隊などを論じる。また、統一戦線（第二次国共合作）下での山東省主席韓復榘などとの関係を論じる。

第二章では、三八年末までを視野に入れ、膠東を例に初期根拠地の樹立を論じる。その際、日本軍の侵略、支配に対していかに農民を動員したかに焦点を当てる。

第三章では、三八年一〇月から四〇年末までで、武漢陥落により日中対峙段階における国共対立激化である。それを背景とする山東と華中根拠地の打通を目指したこと、農民の大量動員などを論じ、山東各根拠地の成立過程を明らかにする。

第四章では、四一年以降、日本軍と華北政務委員会の治安強化運動により、山東根拠地、八路軍が大打撃を受けた。それへの対策、及び四三年秋以降、軍事面での局部的反攻を論じる。その際、農村では減租減息運動を展開し、人民武装の組織化に努めたとする。

第二部は各論であり、山東抗日根拠地内の諸政策、諸側面にアプローチする。

第五章では財政問題に焦点を当て、主に戦争中期における行政組織成立後の田賦、救国公債、貨物税などの変遷を解明する。次いで四一年以降、日本軍の攻勢に対して、いかに財政危機を乗り越えたかを具体的に追究する。

第六章は、前章に続き根拠地の経済的

自立を考察し、興味深い。すなわち、根拠地内に成立した北海銀行に焦点を当て通貨政策を論じる。法幣を本位貨幣とし、北海銀行券を輔幣としたが、四二年以降、後者を本位貨幣とし、自立性を高めた。そして、インフレに対処したとし、連銀券、法幣との一定の交換比率を維持したとする。

第七章では、農民動員の視点から中共の主力軍、地方武装の一角を構成し、生産から離脱しない農民武装の変遷と実態を論じる。

第八章では、山東抗日根拠地の壊滅を目的に、日本軍の軍事面での掃蕩作戦と華北政務委員会が実施した治安強化運動を論じる。それは。遊撃区、治安地区に対して政治、経済、思想、文化各方面で実施された。

第九章は、第八章と同様、抗日根拠地からではなく、日本軍による傀儡軍育成、及び山東省の傀儡軍についてである。傀儡軍、国民党軍（政府軍）、八路軍の攻防、及び相互に寝返るという流動的状況を論じる。

本書の特色と意義

第一に、まず日中戦争時期における山東抗日根拠地の実態を多角的視点から明らかにしたことが、大きな意義といえよう。馬場は盧溝橋事件以降に焦点を絞り、山東省の主要な幾つかの根拠地を対象に、その機構、政治、財政、金融、流通のみならず、日本軍、国民党軍、中共軍、傀儡軍の軍事動向を多角的視点から本格的に解明した。確かに山東研究者としては荒武達朗がおり、スパンは長く、社会学的手法も入れ、清朝咸豊帝時代の山東研究を基礎に、日中戦争期の山東省南部の抗日根拠地の研究をしている。馬場、荒武によって日本の山東抗日根拠地研究の基盤が築かれたといえよう。

第二に、山東省の場合、革命根拠地（ソビエト区、略称は「ソ区」）を経ず、一挙に抗日根拠地（辺区）を形成した。劉志丹の陝北ソ区、そして陝甘寧ソ区に関心を持っている評者にとって新鮮な驚きを禁じ得ない。なぜなら陝甘寧辺区の場合、陝甘寧ソ区を基盤に樹立されたからである。馬場によれば、四〇年には山東省で行政主任公署や県政府など行政機構を整え、発展したという。それを可能にしたのは、統一戦線下で省主席韓復榘らとの協力があったからとする。[2] また、八路軍山東縦隊が国民党軍から給養や武器を入手した。軍の創設と建設を重視し、四〇年以降、中共権力が浸透し、農民の人民武装が増大した。農民の支持下で農民救国会、互助会などを組織したことを指摘する。

第三に、会門である秘密結社・紅槍会は馬場の起点ともいうべき研究である。それ故、固有名詞として何度もでてくる。だが、研究基盤、蓄積もあるにもかかわらず、「中農主体の郷村自衛組織」などと簡単な説明が付されているに過ぎず残念であった。その実態、山東抗日根拠地との関係を、紅槍会、哥老会のみならず、他の秘密結社も含めて、もう少し具体的、かつ詳細に論じれば、より充実したのではないか。また、儒教を核とした「豪傑」集団である水門丁の実態と、それとの関係も具体的に知りたかった。

第四に、四一、四二年、日本軍と華北政務委員会の治安強化運動で根拠地の三分の一が減少した。そうした状況下で、精兵簡政により軍党政要員の生産離脱を極力おさえ、主力軍を精兵化した。また、減租減息運動を各地で展開し、農民の生産回復や生活向上をもたらし、軍事動員を可能にした。四二年末には、根拠地を再建した。また、日本軍の経済封鎖に対抗する形で逆封鎖を実施した。貿易局は食糧、綿花など重要物資の移出を禁止、非必需品を移出し、軍需品と必需品を移入したという。

第五に、四三年秋以降、山東根拠地が発展に転じた。その要因は、(1)四三年七月山東省政府と国民党軍が消え、日本軍も大陸打通作戦などで移動した。根拠地への軍事的圧力が緩和した。(2)四四年以降は減租減息運動の全面的な展開で農民の大規模な参軍が可能となった。中共権力が基層社会へ浸透した。(3)財政経済政策で統制管理を継続し、専売、交易面での税収が増加した。さらに工商管理局の物価調整、法幣の使用禁止と北海銀行幣の本位貨幣化により物価を安定させたとする。

感想と疑問

現在の研究段階、史料開放状況の限界もあるが、以下を指摘しておきたい。

第一に、日中戦争以前、山東省は中共とどのような関係にあったのか。どこまで中共は浸透していたのか。ソ区を経過して建設された辺区と、それを経ずに建設された山東省との共通性と相違点は何か。また、全国の抗日根拠地における山東抗日根拠地の位置づけがよくわからなかった。山東省以外の根拠地との関係、断絶はどのようになっていたのか。さらに山東省には複数の辺区があるが、相互連絡はどの程度とれていたのだろうか。

第二に、山東抗日根拠地の解明において北海銀行を本書の大きな柱の一本としたことは大変重要である。北海銀行幣の信用度は高く、成功したことを示唆している。私もそのように認識しているが、なぜ成功したのか。北海銀行の前身、もしくは影響を与えた銀行はなかったのか。当初、山東抗日根拠地内で儲備券ではなく、法幣を流入させた理由は何か。国家四大銀行を背景とした法幣の信用度が高いという理由か。そもそも北海銀行の存立基盤、信用は何か。中共の権力、影響力だけで説明がつくのであろうか。山東省は広く、省内だけでも抗日根拠地は複数あり、中南部は法幣、儲備券、北部は法幣、連銀券。それに日本軍の軍票がからまり、貨幣戦を展開している。北海銀行幣の年度・月別発行高の統計史料、法幣、儲備券、連銀券などの流入額の統計表がほしい。物価問題とも関連する。できれば、それらに基づいた分析がほしいところであった。

第三に、日本軍などによる封鎖、逆封鎖がある。この問題は抗日根拠地の存続にかかわる重要問題である。馬場は、日本軍の経済封鎖に対抗する形で逆封鎖を実施し、貿易局は食糧、綿花など重要物資の移出を禁止、非必需品を移出し、軍需品と必需品を移入したと指摘する。これも興味深い指摘である。なぜなら封鎖されている辺区から非必需品をどこに、

どのようにして移出したのか。非必需品とは何を具体的に指すのか。そして、軍需品などはどこから、どのような手段で移入したのであろうか。その具体的品目、量に関する統計資料があれば、さらに説得力を増したと考えられる。

第四に、山東省は、元来、改良主義運動が強い地域ではないか。三〇年代には、省主席韓復榘もそれに理解を示し、韓の要請を受けた梁漱溟が中共の土地革命（地主からの土地没収と農民への土地分配）に反対し、山東郷村建設研究院を設立、農業合作社、郷村教育を梃子に郷村建設運動を展開した。辺区が成立し、土地没収と分配ではなく、あくまでも土地改革であり、減租減息、合作社設立などの政策はある面、こうした改良運動と似ている面がないとはいえない。それらのある部分を継承している可能性も否定できない。

第五に、山東省は華北農村と同じ農民構成ではないのか。すなわち、小作人が多い華中南と異なり、自作農、半自作農地帯と考えられる。当然、大地主も相対的に少なく、ほとんど小作争議が起こりえないのではないか。とすれば、減租減息の効果だけでは限界があるのではないか。これを分析するために大・中・小地主、富農、自作農、半自作農、雇農などの農民階級構成とそれぞれの比率を知りたい。アプリオリに地主を敵と記述しているが、中小地主には抗戦地主も存在する。革命根拠地時代の土地革命では地主からの土地没収、配分であるが、辺区では抗日地主も存在するのではないか。中小地主、富農を優遇している可能性はないのか。

第六に、馬場は革命根拠地（ソ区）時期の土地革命（地主の土地没収と農民への分配）と抗日根拠地（辺区）時期の土地改革（減租減息）をあまり区別していないように感じられる。減租減息は自作農創出というが、繰り返すが元来自作農比率が多いところである。ただし馬場の主眼はここにはないようで、土地改革が農民動員・参軍と結びついたか否かの究明にある。というのは、最近、土地革命が農民動員の自発的参加を結びつけることに否定的な論説が台頭してきた。例えば、高橋伸夫、阿南友亮が複数の革命根拠地で土地革命は失敗し、土地の再分配が進まず、農民動員に成功していないと主張した（あくまでも革命根拠地時期で抗日根拠地ではない）。それに対して、馬場はそうしたことは一概に言えず、減租減息政策により階級的自覚を持ち参軍した農民もおり、時期によって異なると主張している。強弱はあるが、荒武も減租減息運動が動員にある程度、有効に機能したと肯定的な評価をしている。となると、山東抗日根拠地では時期によって有効であった可能性がある。私見を述べれば、まずやるべきことは、日中戦争以前の革命根拠地における土地革命と日中戦争開始後の抗日根拠地における土地改革を混同せず明確に区別して論じるべきと考えている。もし時間があれば、私も陝甘寧ソビエトの土地革命（土地改革ではない）の実態と効果を実証的に研究し、この議論に参戦できればと思う。

その他、馬場は資料の入手困難さを述べたうえ、入手できた資料で丁寧な実証

を試みている。繰り返すが、現在の中国の政治情勢から資料開放率が不十分で、これは致し方ないことであろう。ただ頻発資料に関しては、意義と限界を含めて有用性を明示すべきだったと思う。例えば、『山東解放区大事記』（一九八二年）は時系列で記述され、大変便利である。ただし歴史事例が取捨選択されているという問題点も指摘しながら使用した方がよかったのではないか。

以上、無い物ねだりで勇み足の部分があったかもしれない。ご容赦願いたい。種々書いてきたが、本書は大変豊富な内容をもっており、日中戦争、中共、山東の抗日根拠地などの実態を知り、考察するうえで一読の価値があることはいうまでもない。

注

〈1〉馬場毅氏は編著も少なくなく、『多角的視点から見た日中戦争――政治・経済・軍事・文化・民族の相克』（集広舎、二〇一五年）、『近代日中関係史の中のアジア主義――東亜同文会・東亜同文書院を中心に』（あるむ、二〇一七年）などがある。

〈2〉韓復榘は興味深い人物で、国民軍馮玉祥の大幹部であったが、二九年蔣桂戦争が勃発すると、動揺しながらも蔣介石支持を表明。山東省主席に就任後、同省を半独立状態とした。三六年西安事変では張学良、楊虎城を支持、反蔣的姿勢を明確にし、かつ日本軍の山東出兵に戦わずして退却。三八年蔣によって殺害された（家近亮子「韓復榘」『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年参照）。

〔付記〕本書評を執筆しながら、馬場氏が中心となって八人で訳した『日中戦争史資料――八路軍・新四軍』（龍渓書舎、一九九一年）を出版したことも懐かしく思い出した。これも実に約二〇年もかかった。当初、河出書房から出版する予定であったが、あまりに時間がかかりすぎ、河出書房新社となり、ご破算となった。訳者の多くは馬場氏に若干の不満を抱きながら、出版を完全に諦めた。ところが、馬場氏は諦めず、最終的に龍渓書舎から出版できたのである。本書でも粘り強さを発揮した。敬服すべき姿勢といえよう。